

【翻 訳】

William Stafford の詩 19 編

矢 口 以 文

あり得る物語

もしあなたが揺りかごの中で取りかえられ  
実の母が何も  
言わずに死んだとしたら  
誰もあなたの苗字は分からない  
この世のどこかで  
実の父が途方にくれて あなたが必要であっても  
あなたは遠くにいる

どんなに心から助けたいと思っているかを  
父は分からない  
大風が吹き  
雨の略奪が襲う時  
あなたは片隅に立って震えている —  
過ぎ去る人々の  
冷静さとまどいながら

「さすらう者よ あなたは本当は誰なのか」  
心の中をどんな日にも走る  
この囁きが彼らには聞こえない —  
まわりの世界が  
どんなに暗くて冷たくとも  
「多分 私は王なのだ」と

あなたは答えなければいけない

### カナダとの国境ぞいにある国立公園ではない野原で

この野原で戦争は行われなかったし

無名の戦士も死ななかった

この野原で草が手をつないだ

記念碑は立っていない

唯一英雄的なものは大空だ

鳥たちは翼をひろげて 広い

平野の上を音もなく飛んでいる

ここでは誰も殺さなかったし 殺されもしなかった

なおざりにされることで聖地にされている 空気はとても穏やかだ

人々は名を忘れることでここを祝っている

### 秋 の 旅

動物の足で 夕暮れが川ぞいの灰色の小屋にやってきた。

私は棒切れでドアを押し開いた。

以前は長く歩いてそこに行き、

私の前に置かれたその大陸に一步步つ入ったものだ。

風雨にさらされた木材、石の暖炉、壊れた椅子、

ポプラの下の枯れた草を読み始める —

するとみんながみつめかえす。前にどこかで

会ったことがある、と記憶が語り始める……

読むのを止める。父の眼は灰色だった。

影

あまりに無口な人は歓迎されないだろう --  
よそよそしい生き方だから。  
しかし私の育った所では引っ込み思案も  
簡単に許される。

母が子供だった時 インディアンが  
あのあたりの不毛な土地を影のようにおおっていた。  
冬の朝には熱いものを  
手に持って学校に走った。

彼女はつまり -- 全く異なった外国人だった。  
耳が良く聞こえなかった。  
世界は遠くにあった。(他の人たちは笑っていたのか?  
彼女には分からなかった。)

のちに、おびえはしたが  
人並みに愛した。  
やせて荒々しい男が彼女をめとった。  
私はその息子だ。

町の人々からは「鷹」と呼ばれたが 父は  
普通の人だった。  
古い沼地の走っている所にはどこにでも  
わなをしかけ 猟をして生活した。

家はいつも静かだった。  
夏には風車が壁板がきしきし鳴った。  
私はまきを運び 誰にもさわらなかつた。  
冬には黒いストーブが唸り声をあげた。

私のしがみつくこれらの影を許して下さい、  
序文で口を閉ざしがちなこれらの影を。  
私の生きる所ではどこでも鷹は不毛な土地にしがみつく。  
世間では「犬は犬を食う」と言っている。

## 15 歳だった

17 号線の橋の南で  
ある夏の日 柳のうしろにオートバイを  
見つけた エンジンがついたまま  
倒れていて 深い草の中を  
ゆっくり動いていた 僕は 15 歳だった

鼓動する輝きを きらきらする  
横腹を ふちのついたつつまじげな様子の  
ヘッドライトを その倒れているところで賛美した  
優しく道路に運んできて その横に立ち  
今にも乗ろうとして親しみをこめた 僕は 15 歳だった

僕は道路の終りを見つけ 17 号線の先で  
空に出会うこともできたのだ 丘のことを  
思った ハンドルを軽く叩くと自信に満ちた考えがもどってきた 橋の  
上で  
つつ走る感情に酔って震えた 僕は 15 歳だった

考えているうちに 草の更にうしろの方に持主がいるのに  
気がついた らんかんをこえて引っくり返った場所で  
丁度意識を取りもどしたところだった 手に血がついていて蒼白だっ  
た—

オートバイに戻るのを手伝うと 彼は手をその上に  
のせ 君は良い人だと言い 唸り声をあげて去っていった

僕はそこに立っていた 15 歳だった

## 音を飲み干した動物

1

今でもこだまが聞えてくる湖を渡って  
ある日音の必要な動物が下りてきた。大きく見回し  
音も立てずに音を取り去った。湖もその回り一帯も  
静かになった。飛びはねていた魚はナイフのように戻り  
水は死んだ。回りの荒野の至るところで  
葉から音をぬき取って山腹に排出し  
岩にキルトを折り重ねて その場になじみの  
あらゆるものを貯蔵しようとした。以前に訪れていた騒音をみな  
埋めこんだ—数千の秋ほど深く。

それからその動物はさまよひ続け あらゆる谷から  
音を飲み始めた—ひきがえるのしわがれ声も  
草の葉の小さいきらきら音も。  
冬まで飲み続け ある夜静かになった場所を  
眺めた—そこは凍った峰々に取りまかれ  
星の光りの浅い水たまりに閉じこめられていた。  
それからとうとう高い静かな場所にやってきて 一番高い山の背に  
立ち止まった—そこからは冷たい空が永遠の  
曲線のように遠ざかっていた 動物はそこを去り  
無言で歩き続け 飢え始めた。

あの夜 月が空を漂った時 丁度その月のように  
全世界は静かに銀を反射させて横たわった—  
月は自分の動物が雪の上で  
死んでいるのを見つけた 暗い吸収性の足 静かな  
鼻づら 厚いベルベットの深い毛並み。

2

音を飲んだ動物が死んだあと 世界は  
数カ月静かになり冷たくなった。月は  
淋しくなって探し回り その光は峡谷の  
西の壁を下りて また東側のうれしげな  
音のない道を上った。その動物が忠実に探し回っていた  
大地に月が君臨した。かつては自分で  
暖めていた生命を太陽は無視した。

しかし山の北側の岩深くに  
こおろぎが眠っていた。あの動物が通った時には  
隠れていたのだ。春がまた訪れたので 重い静けさの中に  
這い出すのを恐れながらも 待っていた。  
こんな沈黙の中で途方にくれながら こおろぎが  
どんなに深刻に感じていたかを考えてごらん—草 葉 流れ それに  
黙した動物たちが皆こんな小さなものに  
かかっていたのだ。それは静かにジーと鳴いてみた すると  
そのひとつの行為から なつかしいあの世界が  
川のようにもどってきた 初めは  
ささやき 次は草や葉の動き 水が  
しぶきを上げ 大きな夜の鳥が金切声を上げた。

生命と音の大切な世界が全部戻ってきた—  
しかし今でも月が丘の上で声高に  
荒々しく探すことがある その動物がすぐにでも  
丘を静かにさまよいおりるのを期待して。  
しかしどこかでこおろぎが待っている。

今それは耳をそばだてていて 夜になると鳴き始める。

## 毛皮を着て

彼らは誰をも傷つけず、北辺をさまよう。  
荒涼とした野を所有して、迷わない。  
喜んで交尾し、恐怖に襲われると走る。  
老いても、生活の動きは変わらない—  
すべてが大地を横切るひとつの型だ、  
ひとつの歩調、ひとつの息、ひとつの……

冬になると集まってきて体を寄せ合う。優しい嵐の中で  
毛皮が集まりひとつのかたまりになる。  
冷たいものは何でも教え、彼らは学ぶ。  
共に立つ。未来がくる。

## 乾いた地方のインディアン洞窟

これらの峡谷を  
いつか  
もう一度使うかもしれない

## 黄色い車

走り去る車の何台かは黄色い。  
今見ていると、通りすぎる時に  
光をあびて ちらちら光る。「多分  
誰かが私を好きになる」という希望を  
考えてごらん。褐色の車は  
気にかけない。青いのは間違いを  
おかした。白いのは試みさえもしなかった。

しかし黄色いのは—振りむいてごらん。  
あなたが幸せなら、希望は長く続く。

## 気 晴 ら し

ジプシーのことを考えてごらん—  
彼らは夕方の煙のように国境を越える—  
それを信じないのだ。神がかまわないなら  
かまうことはないと言う。朝になると  
自分たちの物語を積んで 四輪馬車で  
去る。車輪の音が好きだから  
土地を所有するのをあきらめた。古い新聞や  
割れたガラスを越えて進み  
新しいキャンプファイヤーを始める。時々険しい  
山にのぼり、馬車をおりて前の方に歩き  
馬たちの耳に  
世界で最も古い秘密を囁く。

## 1 年 生

劇でエイミは誰にも  
なりたくなかった。そこでカーテンの役になった。  
シャロンはエイミになりたがった。しかしサムは  
誰かが他の誰かになるのをいやがった—  
そんなことをするのはまちがっていると言った。「わかった。  
僕は僕になるよ、好きではないけど」とスティブが言った。  
それでエイミはエイミだった だけど劇にはならなかった。  
そしてシャロンは泣いた。



## 山々に囲まれて

札幌の東の方で いもを掘りながら  
正午の世界ニュースを聞こうとした

小さいラジオが畝の中で  
弁当箱に立てかけられていた

私たちは何の判断もしなかった 畠は  
広く 木々の生えているふもとまで傾斜していた

伝道師たちがこの世での  
霊の復興を呼びかけた

大きな国々の政治家たちが  
サミット会議を考えていた

老いて腰のまがった大坂さんの奥さんが  
足もとの土くれをかき回した

ひまわりのように黄色い稲の田が  
下方はるかまで続いていた

からすの住む神社の  
鐘が鳴って 休けいの終りを告げた

さよなら なつかしい友だち 首相の話しや  
日陰におかれた水差しを思い出すのだ

## 歌を聞く

「耳を澄ましてごらん」と父が言った。そしたらあの神秘的な歌の  
「コヨーテ」が聞こえてきた。一緒に聞いた。  
川が滑っていった、その重さは  
油のように動いた。「夜になると聞えてくるんだ。  
嫌がる人もいる」と父が言った。「暗い  
感じがする、真夜中みたい、冷たい……」と私が言った。  
父の手が肩を押した、  
「じっと耳を澄ましてごらん」 そのようにして 私は初めてその歌を聞  
いたのだった。

## 母の言葉

炭鉱の奥深くに一日中  
小鳥を置いて 鉱夫たちは  
鳥かごを見張るのだ  
小鳥がさえずっているなら  
汗まみれになり大きな音たてて掘り続ける

しかし地下の深いところが  
突然静かになる  
なにか途てつもなく危険なことが起きたのだ—  
屈強な鉱夫たちは蒼白になり  
走り つまづき 這う—  
小鳥がさえずりを止めるなら—

## ここの西

道が下りてゆく。海で止まる。  
海が続く。空で止まる。  
空が続く。

道の終りに — ピクニックにきた人々、  
岩。私たちは立って見渡す……

この空の終りに別の空があるのだろうか？  
別の海が？  
世界が？ 道が？

あなたはどうか？  
私はどうか？

## 納屋の横の明かり

夜中輝いていた納屋横の明かりが  
小さなそよ風のくる明け方には薄くなる

小さなそよ風が吹いてきて 野原の眠りを  
ゆさぶり のろのろの風車を目覚めさせる

風車はのろのろ一日中歌って  
忙しいにわとりたちに苦しみと困惑を告げる

小さいそよ風はのろのろの風車についてまわり  
にわとりたちはせわしく働く — 太陽が落ちるまで

それからまた納屋横の明かりがともる

## 父 1942 年 10 月

道路地図と違って  
拾いあげると、  
自分の死だ。簡単に手に取るのだが、  
その強い指先から何物もそれを奪うことはできない。  
親指の鼓動が地図の上で  
「来週の火曜日、午後 1 時 19 分、  
この交差点で」と言う。救急車が  
鼓動を開始し、父の顔には疲れが押し寄せてくる。

## 熟 考

光で満ちた動物たちが  
森の中を歩き  
暗やみをこめた銃で  
狙いをつける誰かの方に近づく

それが世界だ 神は  
身じろぎもせず  
それが起こるままにしておく 何度も  
何度も 何度も

## 北海道の歴史

昔 この土地で 山々が  
大きな動物のように動いた。村々を

食らいつくして 海の中にまで  
下りてきた。その頃 天候はいつも  
飢えていた。その氷の歯が  
夜毎に深く食い込み もどってきては  
もっと食い込んだ。冬にはあらゆるものを  
食らいつくした。星々は誰にも無関心で  
雲のあいたところには  
どこにでも穴をあけた。大きな木々が  
今集まって 熊が  
唯一の住民だった頃の物語を囁いている。

【注】

「あり得る物語」, 「カナダとの国境ぞいにある国立公園ではない野原で」, 「秋の旅」, 「影」, 「15 歳だった」, 「音を飲み干した動物」, 「毛皮を着て」, 「乾いた地方のインディアン洞窟」の訳では, *Stories That Could Be True* (Harper & Row, 1977) を使い, 「黄色い車」では *A Glass Face in the Rain* (Harper & Row, 1982) を, 「気晴らし」では *Practices of the Wind (A Magazine/Anthology of Paetry 1981, 1982, 1983)* を, 「一年生」, 「山々に囲まれて」, 「歌を聞く」, 「母の言葉」では *An Oregon Message* (Harper & Row, 1987) を, 「この西」では *A Scripture of Leaves* (Brethren Press, 1989) を, 「絨屋横の明かり」, 「父 1942 年 10 月」, 「熟考」では *The Darkness Around Us Is Deep* (Harper Perennial, 1993) をそれぞれ使った。「北海道の歴史」は, 生前 William Stafford が訳者に送ってくれたものを翻訳したものだが, 原文は未発表である。

## TRANSLATIONS

Translations of William Stafford's 19 Poems

Yorifumi YAGUCHI

Walter de la Mare: *Peacock Pie*

Tadao NOGUCHI

The Letters of C. L. Dodgson  
to the House of Macmillan  
(3)

Kumiko TAIRA